

## SER no.058; あとがき

著者	和田 正平, ワダ ショウヘイ, Wada Shohei, 江口 一久, エグチ カズヒサ, Eguchi Paul Kazuhisa
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	58
ページ	113-113
発行年	2005-12-26
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/1857">http://hdl.handle.net/10502/1857</a>

## あとがき

この調査がJICAの日本・ガーナ医療協力プロジェクトの一環としておこなわれたことは、すでに冒頭で述べたとおりだが、調査の実施、成果の取まとめ、報告書の作成、出版等がこれほどまでの困難に遭遇するとは当初ほとんど考えが及ばなかった。つまり、国内の共同調査とは異なり、諸外国の研究機関(とりわけアフリカ諸国の場合、すべてではないにしろ)との共同の調査研究は様々な面で勝手が違い、面喰うことが多く、「どうして、こんなことに時間がかかるのか」という苛立ちを痛感した。

しかし、調査終了後、なんとか調査票をもち帰り、民族誌諸資料、写真、フィールドノート等を整理し、報告書作成の準備にとりかかった。集計費用は当時のJICA医療協力部が予算を組んでくれ、幸いにしてアンケート調査の集計作業は6か月ほどで終了した。問題は報告書の作成、出版であった。編集及び著作権で意見の調整が必要なうえ、報告書はガーナ側は当然英文出版を主張すると考えられるため、この段階で報告書作成は頓挫した。

しかし、調査結果は公表する責務があり、いつか機会に恵まれれば出版したいと考えていた。時間が経過していったが、同時に調査当初の著作権等の諸問題も自然に消滅していった。また、調査時点の1981年頃のガーナは国家財政が破綻状態に瀕していたが、90年代以降は経済は復興に向い、社会も安定的になり、学術研究も進展するようになった。われわれの調査から4半世紀、今調査資料は歴史のカテゴリーに入るのかもしれないが、それでは、アコラボ村の人びとの生活とりわけ医療と食生活はどのように変化したのであろうか。提示したデータが変化の様相を知るための指針として多少とも役立つならば誠に幸甚である。

さいごに、本報告書は、長年共同調査で寝食を伴にすることが多かった江口一久氏が民博を停年退任し名誉教授となるのに合せて出版しようと計画したが、残念ながら私がアフリカ調査に出発し校正が遅れ、紅葉の季節を迎えてしまった。欲をいえば、まだ不備な箇所を承知しており、完全にしたいという思いはあるが、とにかく叱正を受けても筐底に埋れていた民族誌諸資料のひとつをかたちにしてきてわたしは、今はさすがしい気分である。本報告の出版を承認して下さった研究出版委員会の杉本良男委員長及び委員の方々に厚く御礼申しあげる所である。同時に、校正に手間どりながら、わたしの無理な注文にも辛抱強く対応してくれた編集室の畑田昌香さんにも心からの謝意を表しておきたい。

2005年10月28日  
豊中の寓居にて  
和田正平